

あまりに短期の評価が多すぎる。短期の評価だと、人間の成長・発達を手応えを持つてつかむことは難しく、その不安感がスタンダードをどんどん細かくして、「アリのバイ」に何かやっつけているだけの作業につながる危険がある。学校教育評価の基本は、卒業生による長期的評価だと考える。

トモエ学園の、みんなはだかんぼでプールの実践(①93頁)は、高橋君が「肉体的なハンディキャップによるコンプレックスをほんとうに持つていない」人生をおくったことで確かに評価される(338頁)。「君は絶対できるからね」と言われたことが人生を支えていく。「トモエ学園、いい学校!」入ってみても、いい学校!という感覚(253頁)をぶ厚い経験が裏打ちする。

和光の沖縄学習旅行が、安藤文音さんにとっては、大学での原発立地地域の住民運動の調査につながり、さらに報道記者生活の原点となる(②50頁)。学校生



活がその後の人生の中で意味を深め、それがPDC Aサイクルを超えて学校教育の価値をつくっていく。70年の歴史を誇る日生連。自分の教育実践について、当時の子どもたちが大人になってからどういう意味を持ったのか、聞いて検証しようではないか。さらに退職した会員は、自分の受けた学校教育を『窓ぎわのトットちゃん』のように記録し、また専門の目で検証・評価しようではないか(「新教育」はどんな経験だったのか)。実践を感覚でとらえるだけでなく、理論や長期の経験でしっかりと裏打ち・評価する仕事は、長く学校に携わった人にかできない。

(研究部・加藤聡二)

参考文献

- ①黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』(青い鳥文庫) 講談社、1991年(原著1981年)。
- ②和光小学校・和光鶴川小学校2016沖縄周年行事実行委員会『語り継ぐ平和・沖縄 沖縄学習旅行記念誌 和光小学校30周年 和光鶴川小学校20周年』タチカワ印刷、2016年。